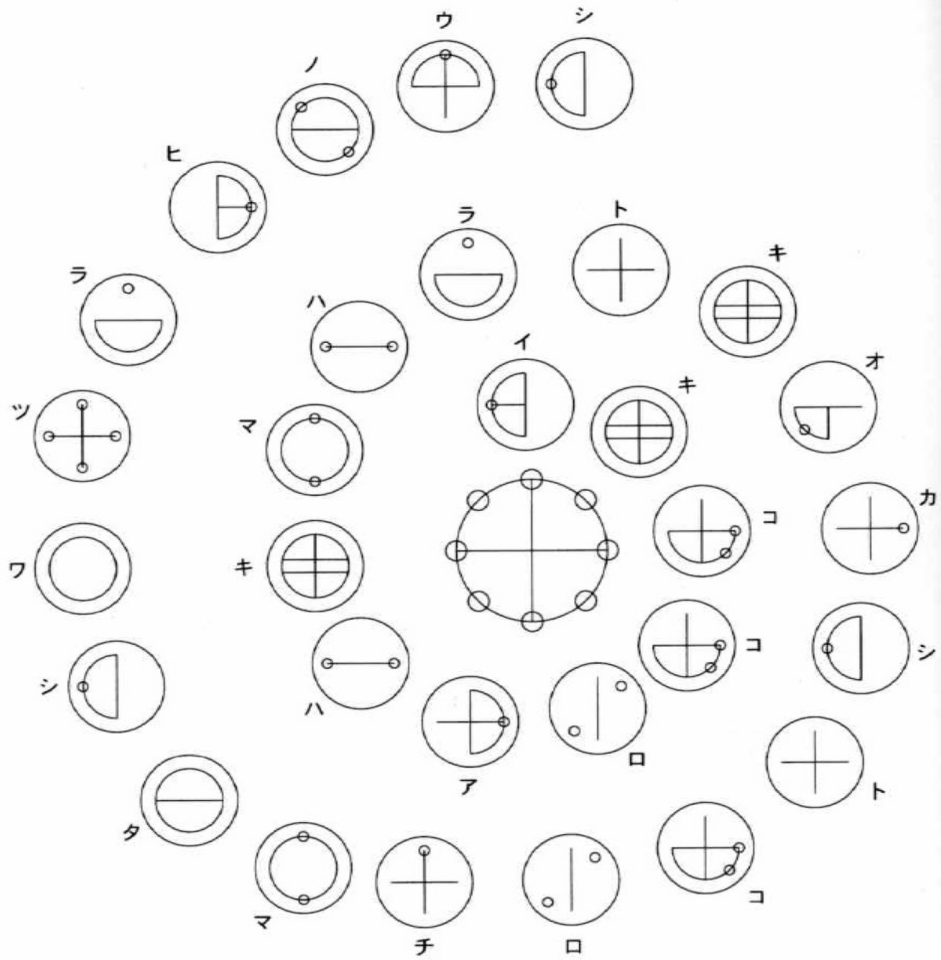


第五十一首



イキココロ
 アハキマハラ
 トキオカシ
 トコロチマタシ
 ワツラヒノウシ

・第五十一首解説

イキココロ（生命の最小単位の電気粒子の発生の繰り返し、繰り返し。オクから正反にあらわれる小粒子。49首、50首で「イキココロ」の発生の物理を示してきたが、51首ではそのイキココロが現象界において、どのような状態で実在するのかという物理を示している。）は、ア（現象界の）ハ（正反に）キ（発生し）マ（現象物の）ハ（正反に）ラ（あらわれる）。50首で「アハキ タカタマ」とっていたのが、「ミチノナカチハ」だという示しであったが、ここではその「タカタマ」の「ミチノナカチハ」が実際に「アハキ マハラ」になるという物理を示している。

「トキ」して示され、「トコロ」となって「ワツラヒ」がト（フトの重合のマニ）キ（発生して）オ（六方環境の）カからシ（示され）ト（重合の）コロ（粒子が）チ（持続的に）マ（にアマから）タ（独立して）シ（示され）ワ（全体と）ツ（個々に）ヲ（現れている）ヒ（根源の）ノ（変遷の）ウ（潜象界面の）シ（示しとなっているのである。）

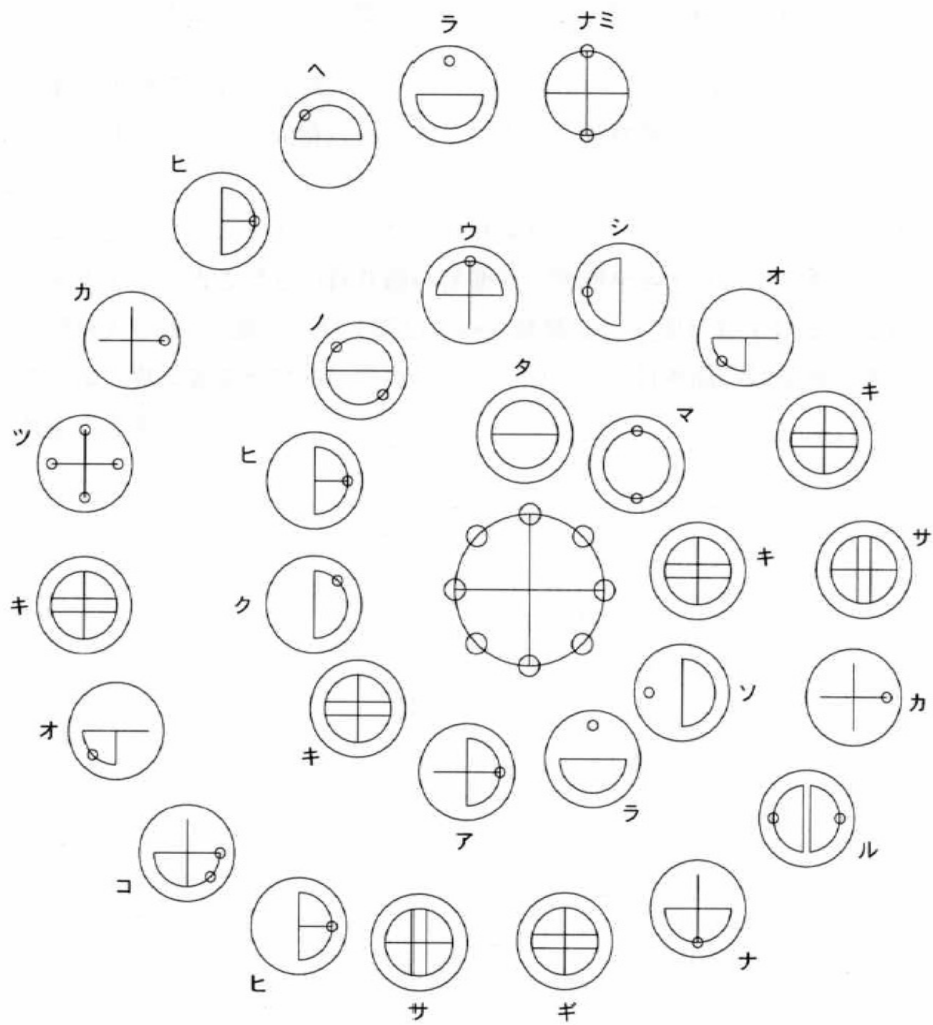
「トキ トコロ」という上古代語を檜崎氏は「時間量・空間量」に当てた。「トキオカシ トコロチマタシ」とあるが、私たちの持つ時間・空間の概念は、上古代語から、無意識のうちにそのニュアンスを受けついているのである。

「トキの経つのは早い」や「溺れるトコロを助かった」「トコロで、、、」など、単にトキが時間、トコロが空間だけの思念ではないことが分かる。

「アハキ」の「ア」はアマ現象界の全体の「ワ」を意味し、「マハラ」の「マ」は、アマの「ワ」から「タ」した個々のマリである。

「ワツラヒ」といえば、「煩い」「患い」などが浮かぶが、カタカムナ人のいう「ワツラヒ」とは、ワとツにあらわれるヒを指し、「ワラヒ」も「ツラヒ」も当人にとって喜ばしいものである。「ワラヒ」が「笑い」の意味になったのは、生命にとってありがたいものを喜ばしく思う気持ち、オノズカラ「笑い」の表情（アラワレ）を示すからのことであろう。

第五十二首



タ
マ
キ
ソ
ラ
ア
キ
ク
ヒ
ノ
ウ
シ
オ
キ
サ
カ
ル
ナ
ギ
サ
ヒ
コ
オ
キ
ツ
カ
ヒ
コ
ヘ
ラ

ナ
ミ

・第五十二首解説

タしたマとしてキ（発生し）ソ（そこ）にラ（あらわれたものは）ア（現象物を）キ（発生する）ク（自由な）ヒ（根源の）ノ（変遷の）ウ（潜象界面の）シ（示しである、それは）オ（六方環境から）キ（発生し）サ（かれた）カとしてル（存在する）ナギサ（何回も発生を繰り返すカの重なるの）ヒのコ（反復発生の粒子である、そして）オ（六方環境から）キ（発生した）ツ（個々粒子の）カのヒからへ（方向性を以って）ラ（あらわれる）「ナミ」（何回もミの反復を繰り返す振動現象）

「タマ」の概念は、全てカムからの変遷であるという示し。それに幾段階もの球状があるとし、現象界に発生しても、その発生の状態によって「アメ」「ウミ」「ツミ」のような潜象過渡のものと、「イハ」「イカツ」「アキツ」「ヨモツ」のように現象の極微粒子のものがあり、総称して「マリ」「タマ」「コロ」「ツ」といっているのである。

そしてそれらの「アメ」「マリ」「ミ」「コロ」「タマ」の微粒子のそれぞれの発生の過渡の状態を、「アマツカミ」の最初から「モコロ ミツゴ」の「カムツミココロ」と「アハキ タカタマ」の「イキココロ」の潜象粒子発生の物理として示し、更に「タマキソラ」の現象粒子の発生の物理として正確にコトバ化して示している。

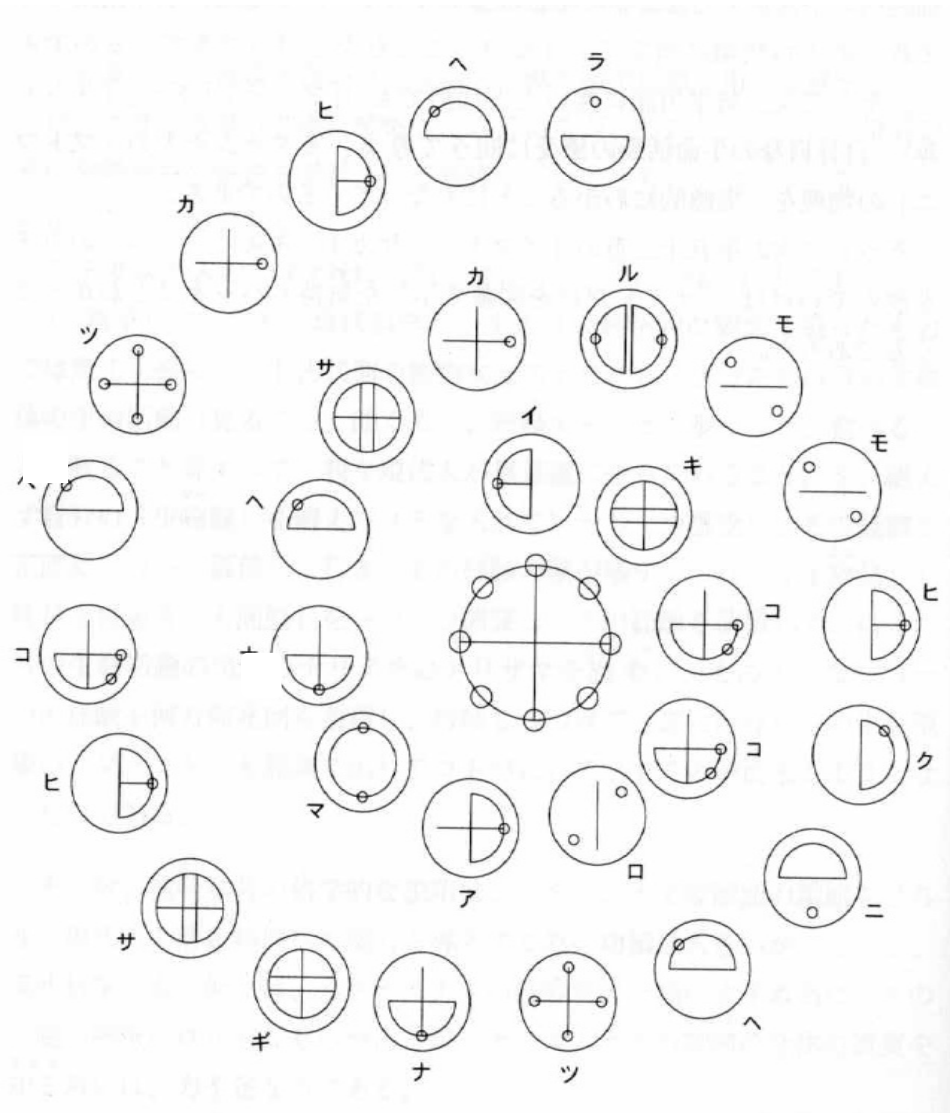
そして潜象過渡の「ミチ」のレベルでは、「アキクヒノウシ」といっている。「ワツラヒ」も「アキクヒ」も思念で訳せば同じような意味になるが、前後のウタのコトバの流れをみると「ワツラヒ」はミ（潜象粒子）のレベルの「ワツ」（全体と個々）であり、「アキクヒ」は「イ」（現象粒子）のレベルの「アキ」（現象に発生したもの）であることが分かる。

「ソラ」といえば「空」が浮かぶが、カタカムナ人の「ソ」の思念はその凶象から指差して「ソコ」「ココ」という時のコチラよりはもっと離れたソチラとか、すぐそばのコレより少し離れたソコというような思念である。

「ク」は自由の思念。現象界にあらわれたものは全てカムからきたものであるが、その発生の存在のしかたが実に「ク」（自由）であるというカタカムナ人の直感。「クモ」「クラ」「クヒ」などの自由にあらわれる思念であったが、漢字の「苦」をあてられて意味合いがかわったものと思われる。

「オキツカヒヘラ ナミ」
六方現象から発生して個々の「カ」の「ヒ」の方向性をもってあらわれているものが「ナミ」という意味になるが、「ナミ」というコトバだけ図象符で示されているのは、それが大事な物理用語であることを示していると考えられる。「カミ」や「ミコト」も同じように声音符の中に一つだけの図象符として登場している。

第五十三首



イキ
 ココロ
 アマナヘサカル
 モモヒクニ
 ヘツナギサヒコ
 ヘツカヒヘラ

・第五十三首解説

イ（電気粒子として）キ（発生して）ココロ（繰り返し繰り返し正反にオクからあらわれる粒子）は、アマナ（アマが繰り返し発生して定着したもの）がへ（方向性を以ってカから）サカ（れて）ル（存在する）。さまざまな電気粒子のレベルのことである。「アマナヘサカル」とは、カムの方向性を持つ（ヘサカル）アマナ。

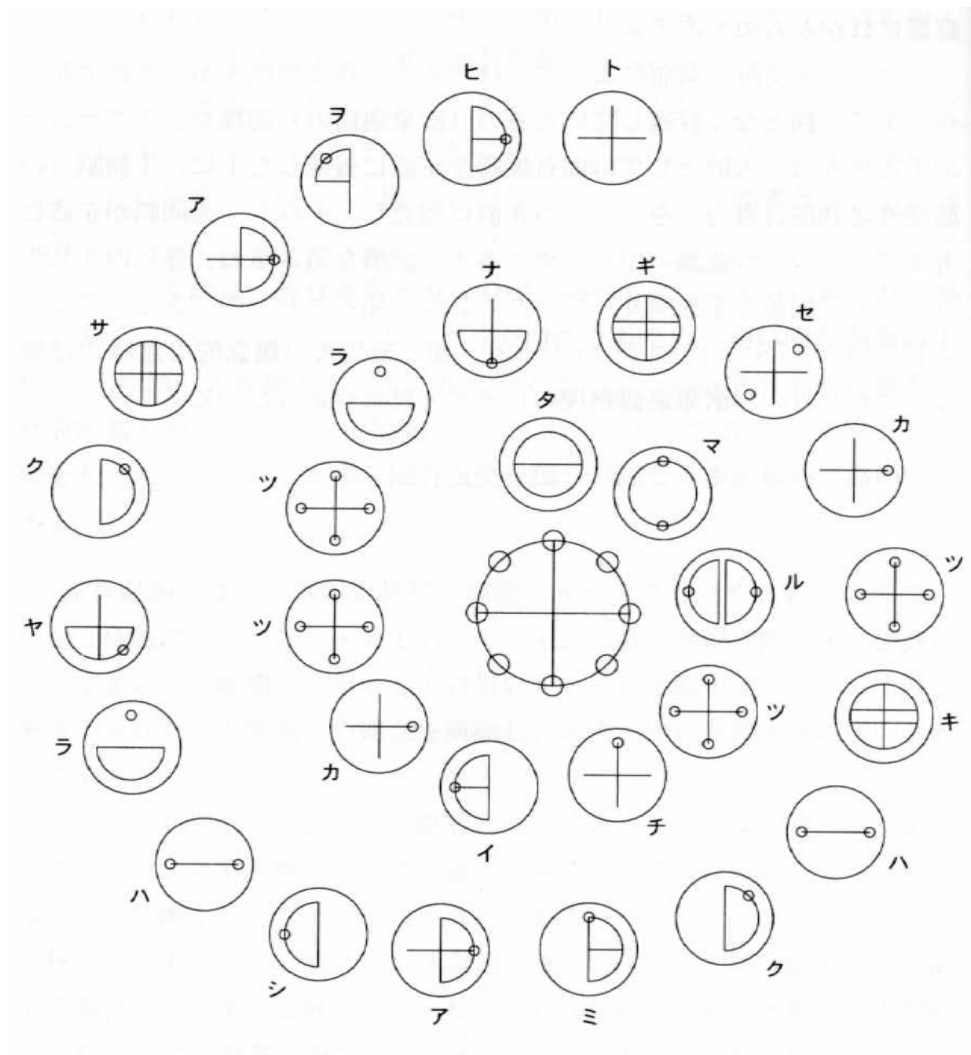
「モモヒクニ」とは、カムから何兆回も正反に変遷した（モモ）、そのヒのクニの思念で、「アマナ アモリ ムカヒ」によって発生したクニ（電子、核子の多様な電気粒子）の構成する多種多様なハコクニ（原子、分子のレベルのことである。）

「ナギサヒコ」とは、44首の「アキクヒノウシ ムカヒマリタマ オキサカル ナギサヒコ」とあり、45首に「フトマニノヘツナギサヒコ カタカムナ」52首に「アキクヒノウシ オキサカル ナギサヒコ」とある「ナギサヒコ」を示す。

「ヘツカヒヘラ」とは、方向性をもった個々粒子の力のヒの方向性をもってあらわれたものという思念。「カヒヘラ」は45首に「カタヘツ カヒヘラ」とあり、52首に「オキツ カヒヘラ ナミ」とあった。

「ヘサカル」のカムの方向性をもつ「アマナ」が「イハクス」の電気粒子の「ハコクニ」の原子・分子によって構成される細胞レベルの「モモヒクニ」の「イキココロ」として「ヘツナギサヒコ」の生命体の多種多様（モモヒ）な器官（クニ）、胃、腸、肺、心などの内臓や頭、胸、腹、四肢や皮膚などの細胞を分裂増殖発生（ナギサヒコ）させ、「ヘツカヒヘラ」の、その生命体の多種多様の器官の細胞に、生命の方向性を持つ生命保持の生命活動の指令の「ナミ」を発するということである。自律神経の交感、副交感の神経伝達のこと。生命発生のチカラはサヌキ・アワのフトマニの「ナミ」であるというカタカムナ人の直感を示している。

第五十四首



ヤ
 ク
 サ
 ア
 ヲ
 ヒ
 ト
 ハ
 ク
 セ
 カ
 ツ
 チ
 イ
 カ
 ツ
 ツ
 ラ
 ナ
 ギ
 タ
 マ
 ル
 ツ
 ツ
 ハ
 セ
 カ
 ツ
 チ
 イ
 カ
 ツ
 ツ
 ラ
 ナ
 ギ

・第五十四首解説

タ（独立的に出て）マにル（とどまり）ツ（個々粒子として）チ（持続するもの）。カからタした粒子のスケールの大きいものを「タマ」といい、小さいものは「マリ」（マから分かれたもの）という。

イカツ（カが現象にでた最小単位の電気粒子の）ツラナギ（イカツのアワナミとアワナギが個々（ツ）の多様（ラ）な粒子（ナギ））を発生する。「イカツツラナギ」は「イカツの変遷の様々な粒子のことを指す。

「セカツチ」とは、セ（正反に次々と）カ（から）ツ（個々に）キ（発生する）という思念になり、「イカツツラナギ」が潜象粒子として次々と発生するという意味になる。

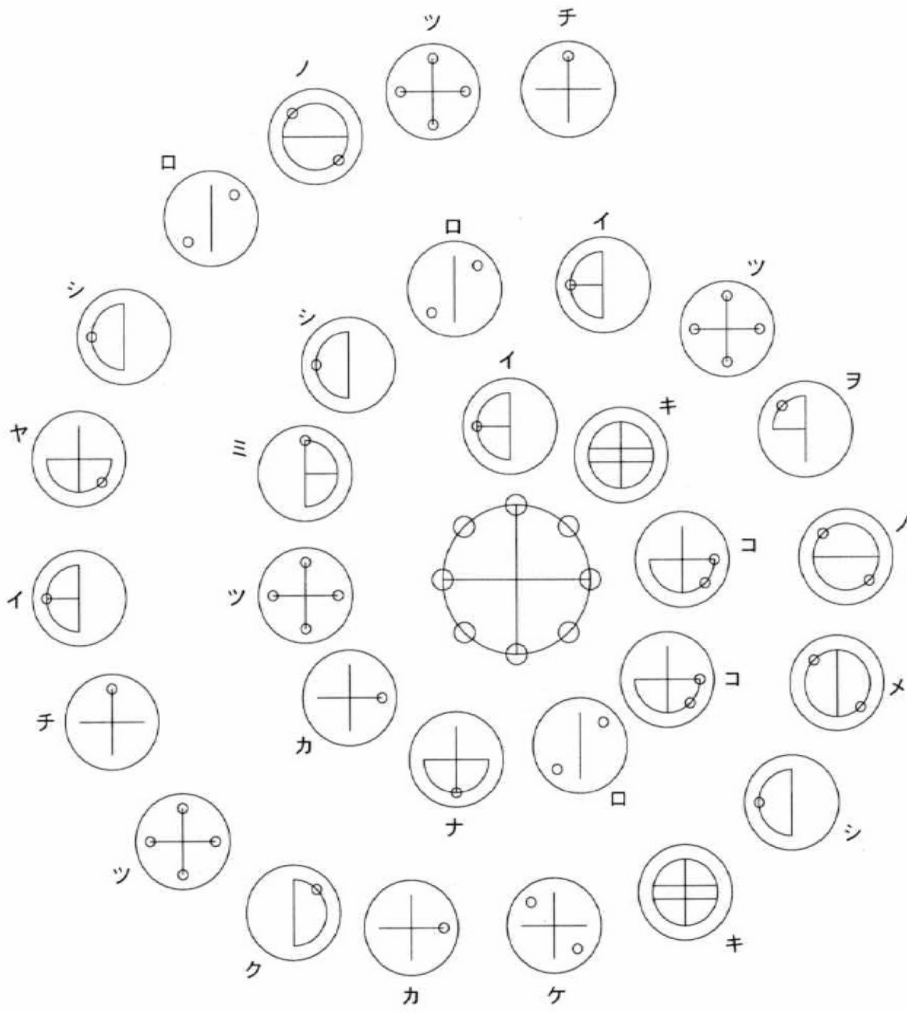
「ハクミアシハラ」は、ハ（正反に）ク（自由に）ミとして、ア（現象物に）シ（示されて）ハ（正反に）ラ（あらわれる）という思念。ここでは、生命の卵子と精子の重合にはじまる実際の生命現象のことをいっている。

ハクミ（正反の自由なミ）というのは全身の器官の正反の器官をあらわしている。

「ヤクサアヲヒト」とは、ヤ（まで）ク（自由に）サ（かれて）ア（現象物の）ヲ（四相性を以って発現して）ヒ（の）ト（重合をもって統合された「ヒト」となる）という思念。カムのチカラをヤまで受け継いで、多種多様な動物次元の進化発達を示した上に、現象物の四面性をもつ人間（ヒト）としての波動量を獲得することでもある。

「ヒト」とは、「ヒ」の重合が統合されて「ヒトツ」になったもの。本来は人間とは限らない。トを繰り返して「ヤクサ」に発達した多種多様な動物の「生命力」（固有振動）を持つものこと（48首）。そしてその「ハクミアシハラ」の正反の上に人間のみの四面性をもってヒトツに統合されたものの生命力（固有振動）を持つという意味になる。

第五十五首



イ
シ
イ
ナ
イ
ヤ
シ
ロ
ノ
ツ
ツ
チ
キ
ツ
ヲ
ノ
メ
シ
ロ
コ
コ
コ
ロ

・第五十五首解説

「イキココロ ナカツミシロ イツヲノメ」とは、イ（電気粒子として）キ（発生し）ココロ（繰り返し繰り返し正反にオクからあらわれるもの・即ち生命脳のアマナ）が、のナ（何回も）カが、ツ（個々粒子の）ミとして、シ（示されて）ロ（次々にオクからあらわれて）イ（電気粒子の）ツ（個々粒子として）ヲ（四相性を以って）ノ（変遷して）メ（発生する）私たちの生体の中で、自律神経の正・反（交感、副交感性）が実際に働くときは、交感神経（サヌキ）も副交感神経（アワ）もまた、正反に働いている、つまり四面性を持つということ。

「シキケカクツチ」とは、シ（示されて）キ（発生して）ケ（変遷性変化性をもつ）カのク（自由な）ツ（個々粒子の）チ（発生の持続）という思念。「イキココロ」が「ナカツミシロ」の「イツヲノメ」になり「ケカクツチ」として示されて発生するという意味になる。

「イヤシロノツチ」とは、イ（電気粒子のチカラ）がヤ（極限飽和安定）までシ（示されて）ロ（正反にオクからあらわれて）ノ（変遷して）ツ（個々粒子の発生）が、チ（持続する）という思念。「イ」が「ヤ」になるまでカムから発生して様々な電気粒子（イツヲノメ）に変遷し、その個々粒子の発生が持続すること、持続されるものという意味になる。

「ツチ」とは、「個々粒子の発生が持続すること」で、「土」でも「血」でも、みな個々粒子が持続したものである。

「イヤシロノツチ」といえば、「イヤシロに変遷した状態が持続する」という思念になり、イヤシロとは「イからヤまで示されて様々な電気粒子に変遷してあらわれる」の思念から「生命をイヤまで盛んにする場」、わたしたち生命のナカツであり大地のナカツである。地球のツチは潜象のカカワリによって生かされている。